

2020年度 みらいの社会づくり実践委員会

委員長 馬場 一光

1. 運営方針

2019年に日本で行われたラグビーW杯は、世界的にみてもW杯のみならず、日本の対応についても高い評価を受けております。それはなぜなのか、スポーツを見にくる方への「おもてなし」が日本人は長けていたのだと考えます。私は観光に携わる仕事をしておりますが、スキー場の例を挙げると、メインはもちろん滑りに行くことです。しかし、その地域のお店に行くことや、民宿に泊まり交流することもスキー場での楽しみの1つなのです。自分も、シーズンになると仕事でスキー場に行きます。そこで、泊まる民宿の方たちのアットホームな感じが良くて「また、行きたいな」と思います。このように、スキーをした後に、その地域の文化に触れるという付加価値により、スキー場では観光客が増え、地域が活性化されるのだと考えます。

日本全体のみならず、ここ熊谷でも、人口が減少していくことで、今後様々な問題が浮き彫りになります。その一つに、企業収入低下がありますが、この問題は青年会議所でも解決できるのではと考えました。そこで、解決策として、地域内外の収入増加に着目しました。熊谷市では、毎年、熊谷うちわ祭や花火大会にたくさんの方が訪れます。加えて、熊谷市は、2019年度ラグビーW杯の開催地、トップリーグチームの本拠地化、試合開催など、新しい熊谷ラグビー場を中心に熊谷を訪れる人々は増加します。

そこで、本年度みらいの社会づくり実践委員会では、「観せよう熊谷の光」をテーマに、スポーツを活かした地域活性化運動をして参ります。だからこそ、スポーツを「する人」「観る人」だけでなく、「支える人」の視点を入れた熊谷の文化に触れてもらうという付加価値を、クールシェアくまがや参加店舗が中心となって発信する機会を創出します。そのような、「地域一体となったおもてなし」を提供していくことで熊谷の魅力を体験してもらい、消費活動による地域内外収入の増加に繋げることができます。そして、「スポーツ」を「支える人」の「おもてなし」の輪が大きくなれば、熊谷の魅力を更に高められます。

スポーツをしに来る人、観戦しに来る人が、熊谷の様々な魅力や体験交流に触れるという付加価値にも惹かれ、何度でも熊谷を目的地として訪れていただけるような場所としていき、更なる交流人口増加に繋げることで、持続的に地域が活性化していくまちを目指します。

2. 事業計画

- (1) 2020年度の社会づくり運動の方向性を共有し、参画意識を高める為の会議の実施
- (2) スポーツを活かし、地域内外から訪れる人々に熊谷の取組を知ってもらい心に残してもらう為の事業の実施
- (3) スポーツを活かし、フェイスブック、インスタグラムなどのSNSを活用した発信の実施
- (4) スポーツを活かし、熊谷の魅力を体験・共有して頂く為の事業の企画・実施
- (5) 非日常の機会と地域資産の魅力を掛け合わせた原体験を提供し、地域の大人、子ども、地域資産がつながることのできる寺子屋事業の実施
- (6) 熊谷の子どもたちが熊谷の地域資産と地域資産とつながりのある大人を知り、自発的な行動を促すことができる地域新聞の発行

みらいの社会づくり実践委員会

【メンバー紹介】

：委員長
馬場 一光
：ビーエム観光（株）



：副委員長・理事
棚澤 浩一
：（株）ゆうせいざ



：理事
松島 清行
：ハウス工房



：副委員長
黒田 泰治
：大和屋（株）



：委員
江森 康文
：FOREST BASE松竹園



：委員
小暮 諒
：焼肉ホルモン 諒



：委員
吉澤 啓介
：（株）騎西屋



：委員
秋山 元紀
：（有）秋山商事

